

書評

Annemarie Goldstein Jutel, 2011 "Putting a Name to It : Diagnosis in Contemporary Society", The Johns Hopkins University Press

佐々木洋子

診断を受けるということは、森の真ん中で地図を手渡されることに似ている [p.1] —このような本書の書き出しは、われわれの経験を組織化し、今後の見通しを立てるのに有益であるという「診断 (diagnosis)」の社会的な機能を端的に表している。だが、ことはそう簡単ではない。「診断」は、様々な社会・文化的要因と絡み合っている。例えば当該社会では、どのような診断名が要請されるのか、それらはどのように用いられるのか、そしてその診断は人びとにいかなる影響を及ぼすのだろうか。

本書『名を付ける——現代社会における診断——』は、医学的な分類に基づく判断、すなわち「診断」が、どのような社会・文化的な関心と相互作用しているかに着目する。診断カテゴリーや診断をめぐる営みのもつ社会的な意味について経験的事例と理論とを用いた分析を行うことで、診断という医学的実践を総合的に理解することを試みた「診断の社会学」のひとつの成果である。

診断の社会学は、他の様々な医療社会学の研究と関連するものの、社会学者によって広く研究されてきたわけではなかった。本書は、関連領域で言及されてはいるものの十分には論じられてこなかった診断に着目し、診断という実践を基軸として、医療社会学における主要なテーマを今日の文脈において論じたものと位置づけることができる。

本書の構成は、以下の通りである。イントロダクションにおいて「診断の社会学」を概説したのち、経験的事例をもって「診断」の多様な側面を6章にわたって論じている。そして結論において、上記をまとめた診断のモデルが提示される。各章について簡単に紹介する。

イントロダクション「名前には何がある？」では、診断の社会学の位置づけとその含意について述べられている。医師、医療、一般の人びと、テクノロジーといった、以下の章で取り扱われるトピックと診断との関連についての概説となっている。

第一章「ひとまとめにするのか分割するのか——医学的診断における分類——」では、ある状態をまとめたり分けたりすることが何をもたらすのかについて、様々な

指摘がなされている。例えば診断は、適切な治療を行うための基本的なステップである。一般には望ましくないと言われている状態についても、医学的観点からアプローチすれば、治療の可能性が生まれてくる。このような診断は、医療においてだけでなく、診断をもとに自己の経験を組織化しようとする一般の人びとによっても用いられている。ここで挙げられた多岐にわたる診断の目的は、以下に続く章で掘り下げられていく。

第二章「社会的フレーミングと診断——肥満と胎児死亡——」では、診断カテゴリーがどのように社会的（に望ましいとされる）信念と結びついているか、どのようにして健康の社会的指標として用いられるようになったか等、診断カテゴリーの前提となる社会的文脈への注意が促される。こうした分析の視点は、本書を貫く著者の理論的立場を示したのものである。診断カテゴリーをどのようなものとみなすかについてはしばしば論争となるが、著者は「社会的フレーミング」の立場を採用するという。これは社会構築主義の代替語として用いられているが、コンテクスト派に近い立場をとるものであり、社会構築主義的分析をする際に陥りがちな、身体的な実在を無視することなく論じることを可能とするため、病を論じる際に有効であるとする。

本章では、その実在について比較的論争となりにくいとみなされる、実体的に計測できるカテゴリーが事例として挙げられている。しかしそうしたカテゴリーにおいてさえも、診断は社会的交渉の帰結として成立することが示されている。ちょうど星座が、星は確かに存在しているが、そのまとまりや並びについての解釈は人間によるものであるのと同様である。

第三章「私はどこが悪いのですか？——診断と患者-医師関係——」では、一般の人びとと専門家間の関係と診断の関連を調べる。診断は、人びとの相談に対し一定の理論的解釈を提供してくれる。そのことで、われわれは自身の経験を組織化し今後の見通しを立てることが可能となる。この解釈を提供できることが、医師の権威や威信を支えてきたのである。

しかし、近年、患者と医師との関係は、一方的な依存関係にあるということはできず、診断における一般の人びとの役割は変わってきている。専門家に相談する人びとは、もはや医師にただ黙って従う患者ではなく、病の経験についての情報をもたらし専門的なパートナーなのである。

他方で、診断は、個々人の生きられた経験のような個別性を考慮に入れない。診断とは、個別的な病の経験を疾患へと変換するが、この際、医師と一般の人びととの間で見解の不一致が起こることがある。

第四章「われわれの理解を超えて？——論争の余地のある診断と医学的に説明できないこと——」では、診断

の欠如が、どのように患者-医師関係の性質を変えるかを描き出す。第三章で指摘された患者-医師関係における緊張は、診断のプロセスで、病の判断において医学と一般の人びととの間にズレがある場合にしばしば生じる。それは論争の余地のある診断と医学的に説明されない症状の場合である。

診断が下されないことは、患者にとって影響が大きい。なぜなら、もし自身が確かに経験している苦しみの状態が疾患と認められなければ、治療を受ける権利が与えられない。パーソンズがすでに病人役割で示したように、診断は患者の治療への移行を正当化するものである。医学的な正当性と診断との間には強力な相互作用があり、患者のアイデンティティとの関わりも深い。

第五章「診断を推進する——商売人と後押しするものたち——」では、医療化について論じられる。そもそも診断とは、ある状態を医学的な枠組みで記述するという点において、医療化の鍵となる。本章では、医療化研究の第一人者であり、本書のまえがきも寄稿しているP.コンラッドの議論を援用しつつ、医療化を促進させる要因を描くことを試みている。相対的に曖昧な診断カテゴリーである女性の性的欲求障害を取りあげ、現代の女性のセクシュアリティについて関心が高まるなかでどのようにしてこの診断が具現化したか、また製薬産業の商業的な関心と医学的研究とがどのように提携可能であったかを描き出している。医学的な関心以外の要因も含め、診断に影響を及ぼす要因を明らかにするには、個別の事例を丁寧に検討していくことが必要となる。また、コンラッドの指摘した製薬産業についてはもちろんのこと、他の産業についても検討することが要求される。

第六章「われわれの探求を逃れるほど小さなものは何もない——診断のテクノロジー——」では、診断のテクノロジーが包括的に検討されている。テクノロジーは、例えば肉眼では見えなかったものを可視化することで多くの診断を支えている。テクノロジーの進歩は、遺伝学の可能性を示す一方で、それに基づく差別の可能性を生じさせるなど生命倫理的な問題もともなう。本章では、診断の社会学におけるテクノロジーの重要性と両義性が議論される。

最後に「結論——診断の社会学の方向性——」において、これまで本書で論じられたものを総合したモデルが

提示される。それは、診断の社会的枠組みと社会的帰結およびそれらを構成するトピックとの相互作用を明示することで診断の複雑性を表すとともに、この分野における今後の議論の必要性を語りかけるものでもある。

以上のように本書は、医療社会学における主要なテーマの現代的展開を、「診断」という営みを軸に、多数の経験的分析を用いて示したものである。本書で扱われたテーマは、医療社会学という領域においてそれぞれが個別に論じられる大きなテーマであり、それらをまとめて論じる本書は非常に野心的な試みであるともいえる。そのためか、やや議論が粗く感じられる部分もあることは否めない。

また、診断やテクノロジーの発展、そしてそれらに続いて起こると考えられる医学的な介入については、その是非も含めて議論となることがあるが、著者はこの点については比較的楽観的な展望を持っているように感じられる（もちろんそれが悪いわけというではない）。

こうした点はやや気になるものの、本書で扱われた諸テーマのなかでも、とりわけ、近年、その積極的役割に注目がされている患者（一般の人びとの場合もある）について明らかにし、その現代的展開について多くを割いて論じてあったことは、病者や患者の経験を研究する筆者にとって非常に有益であったし、それ以上に医療社会学という分野に対する本書の大きな貢献であるといえるだろう。

また、著者が結論部分で述べているように、人間のある状況に対する反応を、「苦しみ」や「悩み」としてではなく「障害」として捉える傾向は、日本も含めた先進諸国を中心に広く見られる趨勢である。こうした現代社会において「診断」のもつ意味や機能を明らかにするという試みは、現代社会論としても興味深いものであったといえるだろう。

他方で、本書が一貫して指摘してきた通り、診断は社会・文化的文脈と強く結びついた実践である。現代日本で見られる個別の診断については、必ずしも本書で示された経験的事例と同じプロセスを辿るわけではないだろう。今後、国際比較の可能性も視野に入れつつ、日本における「診断の社会学」の研究を待ちたいと思わせてくれた一冊である。